

考古学から考える首里城

沖縄県立芸術大学 森 達也

① 首里城の誕生時期

1420年代に拡張、整備され、浦添城から首里城に中山王の拠点が移される。以後、19世紀後半の琉球処分まで王府が置かれ、琉球王国の政治・外交の中心と位置付けられた。

② 首里城の焼失記録

- ・ 1453年：志魯・布里の乱で焼失
- ・ 1660年：火災で正殿その他全焼
- ・ 1709年：火災により正殿・北殿・南殿など主要部焼失
- ・ 1945年：沖縄戦にて焼失
- ・ 2019年：火災により正殿・北殿・南殿など主要部焼失

③ 首里城の考古学調査

(戦前)

1936年12月～1937年1月

鎌倉芳太郎が首里城正殿前、京の内西北側下（東）、京の内西北側下（西）、西のアザナ東南側下の4地点で発掘調査を行い、瓦や中国陶磁などが出土。

参考文献：伊東忠太、鎌倉芳太郎『南海古陶瓷』宝雲舎、1937年

(戦後)

沖縄戦で焼失した首里城の跡地には、戦後は琉球大学が建てられていたが、本土復帰を記念した国の都市公園整備事業として1980年代から首里城の復元が進められた。この事業と並行して首里城跡の発掘調査が1984年から2014年まで約30年間実施され、正殿を中心とした城跡の敷地の大部分が調査された。首里城の復元は、戦災で焼失した時点ではなく、王国時代末期の姿の再現を目的としていた。そのため、発掘調査は王国末期の建物が建てられていた遺構面の検出に重点が置かれ、それ以前の首里城の遺構面の調査は部分的にしか行われておらず、王国末期より前の遺構の大部分は復元された首里城の下に未発掘の状態で見逃されている。それでも、主殿が七回にわたって立て直されていたことなどが明らかとなり、首里城の建築の変遷の一端を知ることができた。出土遺物は、瓦や金属製品、石製品などとともに大量の陶磁器が出土したが、沖縄産の陶器だけでなく、中国、東南アジア、朝鮮、

日本からの外来陶磁器が数多く含まれており、琉球王国がこれらの地域と交流した史実を裏付ける実物資料として注目された。特に王国時代に祭祀が行われていたとされる京の内地点で発掘された土坑（SK001）からは 1000 点余りの陶磁器が集中して出土し、1453 年におこった首里城の火災の際に破損して廃棄されたものと推定されている（1459 年との説もある）。その半数以上は中国浙江省の龍泉窯で焼かれた青磁で占められ、碗や皿などの食器類と共に大形の花瓶や壺、水注など上質の調度品も含まれていた。次いで量が多いのは中国江西省の景德鎮窯の染付（青花）で、やはり壺・皿だけでなく大形の花瓶、水注、蓋物などの上質の磁器が含まれていた。その他に中国福建省で焼かれた天目茶碗、茶入や白磁、タイの陶器壺や土器、ベトナムの染付、日本の備前焼の壺などアジア各地の陶磁器が出土している。上質の品が多いことから、王府で用いられた食器や調度品であったと考えられている。15 世紀中頃の上質の中国陶磁が一か所からこれほど大量に出土した例は世界的に見ても例がなく、琉球王国の海外交流の実像を示す極めて重要な資料であることから、これらのうち 518 点が 2000 年に「沖縄県首里城京の内跡出土陶磁器」の名称で国の重要文化財に指定されている。また、首里城出土の中国陶磁の中には、明時代前期（1368 年から 15 世紀前半）の龍泉窯青磁官器や清時代（1644～1912 年）の景德鎮窯官窯磁器など、中国皇帝のために作られた最上質の磁器が出土している。これらは、一般には決して流通しないものであることから、朝貢の際に皇帝から下賜された特別な礼品と考えられ、朝貢の実像を示す資料として重要である。